

加倉井周一 編
リハビリテーション機器
適応と選択

(AB 判 284 頁 5,768 円 (税込み) 1989 年 医学書院 刊)

奈良 勲

(金沢大学医療技術短期大学部)

この度、加倉井周一博士編集により、氏を含む 16 名の各領域の専門家の方々の執筆による「リハビリテーション機器—適応と選択」が出版された。

機器も道具の範疇に入る。人類はその進化の過程において、生活の営みを一次元の世界から四次元の世界へと拡大してきた。これはまさしく、大脳でイメージされた「身体機能の延長」が道具として開発され現存するに至ったためである。しかし、その開発は主に正常に機能する人間を対象としたものであり、特定の身体機能を一部または全面的に失った人間のための道具の開発は、リハビリテーションという概念と活動が展開されるまでは立ち遅れていた。

近年のこの方面の進展は著しい。これは欧米に限らず、国内における開発にも目を見張るものがある。

障害の克服を援助する立場にある我々は運動療法をはじめ、あらゆる手段を駆使しなければならない。その過程において、リハビリテーション機器の開発とその活用はきわめて重要であることは言うまでもない。しかし、これまで種々の問題が混在する中で、機器の中間ユーザーとしての各種専門家自身の課題もあり、必ずしもエンドユーザーへのサービスが十分であったとは言えない。本書はそれらの課題を改善・解決すべくまとめられたものと理解する。

本書の内容の概要として、「リハビリテーション機器入門」があり、その概念、定義、分類、給付制度の問題、機能障害と機器の対応、機器の選択基準、その他等をわかりやすく解説してある。そして各論として、「日常生活用品、ホームマネージメントと機器、移動用機器、コミュニケーション機器、ス

ポーツ・リクレーション機器」に整理してあり、各機器ごとに概念、分類、構造と構成部品の名称、種類、対応する障害区分、機器の選択基準、規格、公費支給等について解説してある。また各機器に関連した Q & A をふんだんに設けてあり、使用者の立場からのニーズまたは声に答えている。

参考資料として、リハビリテーション機器の公的給付とリハビリテーション機器に関する文献が付いている。

道具が効力を発揮するのは、それが個々の人間の生活、仕事、遊び等にいかにか密着しているかが鍵になり、必ずしも見た目でも価格でもないことを我々は体験を通して知っている。つまり、前記したごとく、道具は身体の一部となって初めて「身体機能の延長」として血が通うのである。したがって、我々がクライアントにリハビリテーション機器を提供するとき、固定概念もしくは既存の価値観に把われることなく、厳しい目で被提供者のニーズを探る必要がある。そのような目で本書を手にするれば、その有用性は十分にあると思われる。